

日本の妖怪とヨーロッパの妖怪

——比較文化の試み——

本研究の目的は、日本におけるカッパとヨーロッパにおける吸血鬼(ヴァンパイア)を調査し、その結果から読み取れる内容を比較して、両地域の差異を浮かび上がらせることである。またそれを通し、妖怪や怪物が食事、ことわざなどと同様に、社会や文化についての比較を行う際の観点の一つになりうるか否かの検討も行った。

論文ではまず吸血鬼を取り上げ、吸血鬼とはどのような存在か、どのように変化して現在の形に至ったのかを述べた。産業革命に続いて起こった西洋社会の世俗化は、吸血鬼にとって変化のきっかけであった。当時のロマン主義作家たちは吸血鬼に恋愛的、情欲的な要素を好んで与え、実証主義的な風潮へ対抗する一つ的手段とした。彼らが行った脚色は、現代の創作作品にまで残る一つの典型となった。本来ならば他の迷信や幻想と共に大きな衰微を経験するはずだったが、それをある程度免れたのは、作家たちの活動が一つの要因となったのは間違いない。

吸血鬼の次にカッパについて述べ、ここでも同様にカッパとはどのような存在で、過去から現在にどのような変化を遂げたのかを述べた。清水崑の描いた「かっぱ川太郎」と「かっぱ天国」の二つのカッパマンガは、現在のようなキャラクター的で親しみやすいカッパ像の始まりとなった。面白おかしく描かれることもあればおどろおどろしく描かれることもあったカッパだが、現代では愛嬌のある存在として定着した。当然だが、この結論で述べているのはあくまで傾向であり、現代における恐ろしいカッパ像及びそれを反映した作品、キャラクターを否定するものではない。

双方の比較では、宗教、マンガと小説、怪物の扱い方の違いに着目した。それぞれの項目で、両地域にとって宗教がどのような存在だったか、日本のマンガと西洋の小説がどのようなものであったか、怪物がどのように扱われていたかを述べ、比較した。特に重視したいのが三番目で、怪物の扱いの違いからは、他の観点からも窺える日本と西洋の精神性の違いを見出すことができた。

結論では、ここまで述べてきた内容から得られた結論をまとめた。比較の章において得られた結論を鑑みて、「妖怪は比較の観点として一定の価値がある」と結論付けた。